

中央植物園だより



ホオズキ *Physalis alkekengi* L. var. *franchetii* (Mast.) Hort.

人家に栽培されるナス科の多年草。初夏、葉の付け根から白い花を咲かせ、花が終わるとがくが生長して果実を包みこむ。果実は球形の液果で、中に多数の小さな種子がある。種子をもみ出した果実を口に含み、鳴らして遊んだ。お盆の飾りや薬としても利用。

撮影：田中義昭さん（平成15年度私の植物写真展応募作品）

開園10周年を迎えた富山県中央植物園

活動報告……………第11回TOYAMA植物フォーラム

話題の植物……………ベニヒモノキ、フユザクラ

研究紹介……………立山室堂平の植物相

日本植物研究の歴史…その1 学名と植物研究の歴史



ドリラス

開園10周年を迎えた富山県中央植物園

富山県中央植物園は、今年の10月で開園10周年を迎えます。開園前から現在までの植物園の歩みを、写真でふりかえってみます。

《沿革》

- 昭和58年 4月 「富山県民総合計画」において植物公園設置の検討
- 昭和60年 2月 「富山県グリーンプラン」において植物公園設置の計画提示
- 昭和60年 7月 「富山県植物公園構想懇談会」設置
- 昭和63年 12月 同懇談会において「富山県植物公園基本構想」策定
- 平成 元年 6月 「富山県植物公園整備委員会」設置
- 平成 元年 11月 同委員会から「富山県植物公園について」報告
- 平成 2年 8月 基本設計
- 平成 3年 5月 造成工事起工式
- 平成 5年 10月 開園（屋外展示園公開）
- 平成 8年 4月 全面開園（展示温室公開）
- 平成 8年 5月 中国雲南省昆明植物研究所と友好協定調印
- 平成10年 8月 全面開園後の入園者30万人達成
- 平成12年 2月 雲南温室完成
- 平成12年 10月 中国雲南省昆明植物研究所と共同研究に関する合意書調印
- 平成13年 4月 開園後の入園者50万人達成
- 平成15年 3月 ドリアスホール完成



富山県中央植物園は平成5年10月1日に開園し、屋外展示園を公開した



全面開園は平成8年4月26日。第13回全国都市緑化とやまフェアのテーマ会場となり、さまざまなイベントが開催された



造成工事中（平成3年10月）



全面開園に合わせて造成された雲南コーナーでは、シナユリノキの記念植樹が行われた（平成8年4月26日）



順調に育つシナユリノキ（平成15年9月）



建築中の展示温室（平成6年3月）



中国雲南省のトウツバキなどを展示した雲南温室が完成（平成12年2月18日）



開園10周年を迎える富山県中央植物園の全景（平成15年7月撮影）。右の写真はサンライトホールと展示温室、世界の植物ゾーン。左の写真は花のプロムナード～日本の植物ゾーン

●開園当時と現在の園内を比べてみると・・・



平成5年7月撮影



平成15年9月撮影

芝生広場付近 (世界の植物ゾーン)

左の写真は開園前のもので、左側にトウカエデ、右にケヤキが見える。その後、ヨーロッパバナナ、センダン、ロツカクヤナギなどが新たに植えられ、より植物園らしい雰囲気に



平成6年8月撮影



平成15年9月撮影

クリ・コナラの森 (日本の植物ゾーン)

開園当時は樹木の支柱ばかりが目についたが、樹木が成長し、森林らしくなってきた。これにもない、ヒメアオキやトキワイカリソウなど、林床に育つ植物も植栽が可能に



平成7年7月撮影



平成15年9月撮影

熱帯雨林植物室

ガジュマルなどの樹木や、つる植物、シダ類が茂ってうっそうとした雰囲気に。池の中には水生植物が増えた。また、写真中央のインドクワズイモが巨大に成長

第11回TOYAMA植物フォーラム 「よみがえる幻の園芸植物センノウ」

古い時代に園芸植物として珍重され、現在はほとんど姿を見ることがなくなったナデシコ科の多年草、センノウに関するフォーラムが、8月3日(日)に富山市内の高志会館で開催されました。

フォーラムでは、はじめに村田 源さん(元京都大学講師)が「センノウとはどんな植物か」と題して講演しました。センノウの学名としてはシーボルトとツッカーニーの『日本植物誌』に発表された *Lychnis senno* Sieb. et Zucc. が使われてきたが、*Aglostemma bungeana* D. Don として発表されている学名があり、これが1836年に *Lychnis* 属に組み替えられて *Lychnis bungeana* (D. Don) Fisch. ex Hemsl. とされた。両者を同種とみなす場合、『日本植物誌』のセンノウの図版の出版は1839年であることから、学名としては *Lychnis bungeana* (D. Don) Fisch. ex Hemsl. の方が早く発表されたことになり、こちらが正名となることを解説していただきました。

また、センノウの再発見については、横浜在住の長谷川綾子さんという方が、松江あたりでセンノウらしい花が盆花として並べられているというので調べたところ、宮廻正幸・皆子夫妻によって島根県で栽培されていることを突き止め、杉原百合子さんを通じて1997年に切花や苗を入手された。長谷川さんはさっそく村田さんをはじめとする専門家に同定を依頼し、東大付属植物園や京都府立植物園、富山県中央植物園などに研究用に苗を送られたということです。京都での栽培結果によると、初年はよくできるが線虫にたかられて数年でだめになるそうで、島根県で栽培されていた畑はやせた赤土であり、こうした条件が病害虫を寄せ付けないことに貢献しているのかもしれないということです。

続いて芳澤勝弘さん(花園大学国際禅学研究所教授)が、「室町文化と仙翁花」と題して講演しました。室町時代の禅宗の文献に仙翁花(せんのおけ)という花が出てくるが、漢詩の内容か



右から、講師の村田先生、芳澤先生、神戸研究員。
会場にはたくさんのセンノウの花が飾られた

らするとあやしい魅力をもった花のように思われ、一目見たいと思うようになったのが、芳澤さんがセンノウに興味をもったきっかけだそうです。

この花が文献にはじめて登場するのは、『愚管記』という日記の永和4年(1376年)8月3日の箇所。一方、禅宗の文献でもっとも古い(あるいは『愚管記』よりも古い?)のは、愚中周及(1323~1409)の『卯余集』(こうよしゅう)だそうです。「仙翁、火を噴いて花魂を返し、直に朝陽と化元を争う(仙翁が火を噴いて花魂となって蘇り、灼熱の太陽とその炎をきそう)」とあり、「火を噴く」という表現が印象的だが、学名の *Lychnis* も「火」を意味するという指摘がありました。

この時代には七夕を中心に仙翁花の贈答が行われ、七夕連歌御会に仙翁花数千本を立てたという記録もあるそうです。室町文化は「わび・さび」の印象が強いだけに、仙翁花という派手な花を数千本というのは意外な感じがするということでした。また、京都五山の禅僧たちの間で、漢詩に仙翁花を添えて贈る風習があったことなどが紹介されました。

最後に、富山県中央植物園の神戸敏成主任研究員が「センノウに関する最近の研究—センノウの謎に迫る」と題して講演しました。これまで、西日本の9箇所から11系統のセンノウの存在が確認されたが、これらはすべて3倍体で種子ができず、同一のクローンである可能性が高いこと。組織培養による大量増殖法を確立したこと。また、かつてあったとされる白花のセンノウの作出を目指して、重イオンビーム照射による変異体の作出を行ったと

ころ、斑入りや花形の変異が出たものの白花の作出には至っていないことなどが紹介されました。

また、3倍体センノウの起源を求めて中国浙江省の天目山を調査したところ、センノウ属の植物を見つけることができたということです。種子ができていたので2倍体と考えられるものの、花色が薄いオレンジ色で、花形にも

変異があり、日本に現存する3倍体との関係は今のところはっきりしないということでした。

会場には県外からの参加者の姿もみられ、講演終了後には活発な討論が行われました。センノウという一つの植物をめぐる、植物分類学から園芸、文化史に至る多様な話題が展開された、興味深いフォーラムとなりました。

話題の植物

ベニヒモノキ

Acalypha hispida Burm. f.

西インド諸島原産のトウダイグサ科の低木で、名の通り赤いひも状の花序（花の集まり）をつけ、観賞用に栽培されます。富山県中央植物園では熱帯雨林植物室の西側に植栽され、オープン以来入園者を楽しませています。

今年になり株元から出た枝に白花が咲くようになりました。「白花のベニヒモノキ」で、おそらく突然変異で生じたのだらうと思われる。紅白で縁起が良いので、話題になりました。

(主任研究員 神戸敏成)

上：熱帯雨林植物室のベニヒモノキ
下：通常の赤い花序と、突然変異で生じた白い花序



ジュウガツザクラ

Prunus × subhirtella Miq. 'Autumnalis'

「秋に桜が咲いた」という新聞記事を目にすることがしばしばあります。春に咲くソメイヨシノなどが返り咲きをすることもあります。ジュウガツザクラは名前のとおり10月から翌春4月まで、ただし富山では降雪期を除き開花します。ジュウガツザクラはマメザクラとエドヒガンザクラの雑種と考えられています。このほか秋咲きのサクラの仲間にはバクチノキやヒマラヤザクラなどがあります。

(主任研究員 山下寿之)



10月から花を咲かせるジュウガツザクラ。園内では「サクラ・ウメ園」に植栽されている

立山室堂平の植物相

主任 吉田めぐみ

室堂平は北アルプス立山の標高2450m前後に広がる台地で、昭和46年に立山黒部アルペンルートが開通して以来、年間100万人もの人々が訪れる山岳国立公園です。本来は高山帯の植生が分布する室堂平ですが、近年低地産植物や帰化植物が見られるようになってきました。富山県中央植物園では富山県立山センターと共同で、室堂平に生育する植物の現状を把握するため、1999年、2000年の2年間にわたり、室堂平一帯の維管束植物相の調査を行いました。

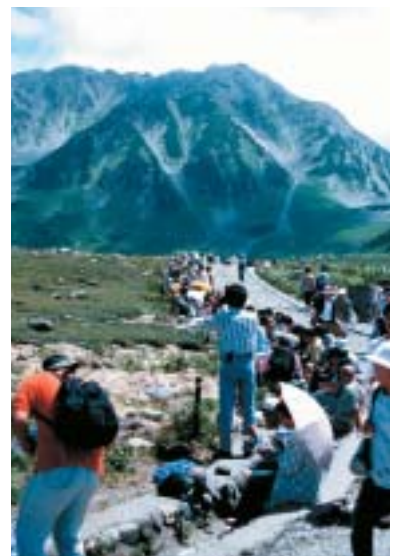
調査地は東西方向は室堂ターミナル裏から浄土沢、南北方向は室堂山中腹から雷鳥沢にかけての標高約2200mから2520mの範囲で、この範囲内を可能な限りくまなく踏査し、1種につき1~3個体の植物体を採集しました。採集した植物はさく葉標本にし、同定を行い、植物目録を作成しました。

調査の結果、亜種、変種を含めて42科202種の維管束植物を確認しました。このうち高山生の種は85種、亜高山生の種は34種、亜高山帯から高山帯に分布する種は34種あり、室堂平が亜高山帯から高山帯の植生に被われていることがわかりました。新たに生育が確認された種は47種で、そのうち自生と考えられる種は24種で、エンレイソウやオオヒョウタンボクなど亜高山生の種が多くありました。立山では標高2300m付近に森林限界があり、室堂平は植生の垂直分布から見ると高山帯に含まれるものの、残雪の多い谷筋等では亜高山生の種が多く見られ、亜高山生の要素が強いと考えられます。

また遊歩道沿いや建物周辺、緑化事業が行われた場所のみで生育が確認され、かつ個体数が少ない種があり、これらは室堂平にもともと自生するものではなく、外部から移入した可能性があると考えられました。このような種は40種あり、全種数の19.8%を占めました。その中にはイワツメクサ、シコタンハコベなど室堂平よ

り標高の高い浄土山等に分布している高山生の種がありました。室堂平は積雪が多く、本来イワチヨウーショウジョウスケ群集等湿潤な植物群落が広範囲に分布していますが、建物の周囲等は乾燥化が進み、ガレ場のような条件となった結果、イワツメクサなど高山の岩礫地に分布する種が入り込んだと考えられます。またスギナ、スズメノカタビラなど低地生の種が6種、フランスギク、セイヨウタンポポなど帰化植物が10種見られました。低地産植物と帰化植物については富山県などにより外来植物の除去作業が行われています。しかしながら今年7月末に室堂平を訪れてみたところ、遊歩道沿いにはスズメノカタビラやフランスギク等が依然として生育しており、未だこれらの植物を完全に除去するまでには至ってないようです。これら移入種を除去し、また新たな移入種を入れないよう、また移入種が生育する場所となる裸地を作らせないような対策が必要でしょう。

この調査結果については「立山センター実績第1号 立山室堂平の維管束植物相－立山室堂平周辺植物調査報告書－1999-2000（富山県文化振興財団発行：2002）」にまとめられています。また採集された植物の標本は立山センターと富山県中央植物園に収蔵されています。



多くの観光客が訪れる立山室堂平

その1 学名と植物研究の歴史

主任 兼本 正

このページでは、今回から日本の植物研究史を主だった研究者たちを中心にふりかえてみます。中央植物園の日本の植物ゾーン、池のほとりのクロマツがその出発点です。

クロマツにつけられた樹名板には *Pinus thunbergii* という学名が書かれています。この *thunbergii* はツェンペリーというスウェーデン

の植物学者を記念してつけられたものです。ツェンペリーはケンペル、シーボルトと並んで江戸時代に日本を訪れたヨーロッパの科学者です。はじめて日本の植物を分類体系の上に位置付けたのは日本人ではなくこういったヨーロッパの学者であり、今日、日本の植物の学名にヨーロッパ人の名前が数多く見いだせるのは、主だった日本の植物が彼らによって新種として発表されたためです。

日本は、ユーラシア大陸の東端に位置し、南北に伸びた島国で気候も変化に富み、国じゅういたるところに多様な植物がみられ、ヨーロッパの学者の憧れの地でもありました。そういったヨーロッパ人に触発されて、江戸時代の後期になると、日本人自らも日本に分布する植物全体を自然科学の一分野として研究するようになりました。それまでの日本における植物研究は中国から伝わった本草学が主体でした。本草学は植物の自然科学的研究というより、もっぱら薬草として利用できるか、毒があるか、食用になるか、染料になるかという人間にとっての有用性を研究する学問でした。

日本人による植物学の研究は、明治時代になって東京大学に植物学教室が設けられてから本格的になりました。日本人として最初に業績をあげたのは田代安定博士で、その後次々と日本人研究者によって多くの新種が発表されるようになりました。その中でも牧野富太郎博士は精力的に新種を発見し、また植物に関する書物を多く著すると同時に、植物学の楽しみを一般の人々にも広めて、日本の植物学の発展に大きく貢献した人物として有名です。

これまで日本の植物は多くの研究者によって明らかにされてきました。しかし今なお完全とはいえません。これからも多くの研究者によって開拓される分野が広く残されています。植物の研究は人間の探究心がある限りたゆみなく続けられるでしょう。



海岸の植物エリアに植栽されているクロマツ (写真上) と、その樹名板 (写真下)

これからが見ごろの植物



ブルー・ジンジャー
10月 熱帯雨林植物室



シクラメン・ヘデリフォリウム
10～11月 高山植物室



ポインセチア
12月 熱帯雨林植物室

お知らせ

イベント案内

■サンライトホール展示 (入園料が必要)

「開園10年のあゆみ・ポスター展」
10月10日(金)～11月12日(水)
企画展「干支にちなんだ植物展」
12月12日(金)～1月14日(水)



「開園10年のあゆみ・ポスター展」では、中央植物園の開園以来のあゆみをポスターでふりかえる

■観察会、講座・講習会

開園10周年記念講演会「自然と桜」
日 時：10月12日(日) 14:30～16:00
場 所：サンライトホール
講 師：佐野藤右衛門(植藤造園16代目、桜守)
参加費：無料

■どんぐりで遊ぼう

日 時：11月9日(日) 13:00～16:00
場 所：研修室、園内
参加費：無料

定 員：40名 ◆要申込

■電子顕微鏡で植物を観察しよう

日 時：1月18日(日) 13:00～16:00
場 所：実習室
参加費：無料

定 員：50名 ◆要申込

■月例行事

日曜植物案内
開催日：11月2日(日)、12月7日(日)、1月11日(日)

時 間：11:00～12:00
参加費：大人(高校生を除く)の方は入園料が必要
植物園オリエンテーリング
開催日：10月19日(日)
時 間：10:30～12:30
参加費：大人(高校生を除く)の方は入園料が必要
定 員：先着100名

◆要申込 このマークの講座・講習会は事前の申込が必要です。申込は開催の1ヶ月前から「往復はがき」で受け付けています。

友の会会員募集中!

富山県中央植物園友の会は、中央植物園を中心に植物の観察・学習などを行い、植物についての知識を深めるとともに植物園の諸活動に協力することを目的とした会です。

■会員の特典 会員証を示しサインするだけで入園できます。/会報や植物園だよりが送られてきます。/多彩な友の会の行事に参加できます。/印刷物の購入や喫茶店での割引が受けられます。

■会費 会費は年額3,000円です。ただし、新規の方は加入月により割引が受けられます。10月から入会の場合は1,500円、11月からは1,250円、12月からは1,000円となります。

■入会方法 植物園の入園窓口で随時入会を受け付けています。会費を添えてお申し出ください。/郵便振替を利用する場合は下記の口座あてに会費を払い込みください。

口座番号：00790-2-11221
加入者名：富山県中央植物園友の会
■有効期限 ご入会の日から翌年の3月31日まで。
■問合せ先 富山県中央植物園友の会事務局
担当) 高橋 TEL. 076-466-4187

富山県中央植物園 入園案内

■開園時間 9:00～17:00 (入園は16:30まで)
11月～1月は9:00～16:30 (入園は16:00まで)
■休園日 毎週木曜日、年末年始(12月28日～1月4日)
■入園料 団体料金(20名以上)
大人(高校生以上) 600円 480円
小人(小・中学生) 300円 240円
※土・日・祝日は児童・生徒無料

富山県中央植物園だより 2003. 10・11・12月号 平成15年10月1日発行(年4回発行)
編集・発行 富山県中央植物園 〒939-2713 富山県婦負郡婦中町上轡田42 Tel. 076-466-4187
印刷 富山スガキ株式会社